

整合を図っていく作業が必要となろう。ちなみに、この資料に類似するものとしては霧島市上野原遺跡10地点でも出土しており、一定の広がりが見られる。

塞ノ神式土器に位置づけられる資料は、第1地点128～149が該当する。

塞ノ神式土器の壺形土器と思われる資料も2点出土している。第1地点の148・149がこれに該当する。なお、無文土器もわずかながら出土している。

これらの資料は、縄文時代早期に位置づけられ、特に石坂式土器を中心とした南九州貝殻文系土器の様相がわかる良好なものとして位置付けできる。また、帯状施文の押型文土器も出土しており、南九州における押型文土器の展開を考える上で今後重要な資料となるであろう。

## 第2章 鹿屋の戦跡遺構

数年前、通行中の車が突然陥没した道の中に落ち込み、車は依然として発見されていないという奇異な事件が鹿屋で発生した。鹿児島県内には終戦前19か所に飛行場が造られ、そこから特攻隊という死を覚悟した人の乗った飛行機が飛び立った。そのこともあり空襲も多かった。また、本土最南端ということから米軍の吹上浜あるいは志布志湾上陸も予想され、防空壕の数も全国の40%以上という多さである。戦跡遺構の数は沖縄と同じ位多いはずである。そうした地でありながら、戦跡考古学の研究は遅れていた。

この研究を本格的に始めたのは前迫亮一氏である。前迫氏の集成によると平成15年までに30か所近くの遺跡で第2次世界大戦関係の資料が発見されている。実際にはそれまでに発掘されても報告されていないものも多いだろうから、この数倍の遺跡で戦跡関係の資料は出ているものと思われる。

前迫氏の資料によると、鹿屋では西原掩体壕跡（前畑遺跡・中原山野遺跡）、打馬平原遺跡、根本原遺跡でこの時期の資料が出ている。西原掩体壕跡は当県において本格的に初めて調査された戦跡遺跡で、戦闘機を格納する掩体壕や誘導路・竪穴遺構などが発見されている。打馬平原遺跡では防空壕通気口が発見され、根本原遺跡では薬莢が出土している。

当遺跡で発見されているのは両地点での爆弾破裂跡と、第2地点の土坑及び溝状遺構である。破裂跡はそれぞれ直径が5mほど、深さが2～3mほどあり、中には鉄片や金属片が多量に含まれている。それらはバラバラになっており、そのすさまじさがうかがえる。土坑と溝状遺構は水ためと思われる土坑とそれにたまった水の排水路と思われるが、排水は土管を通じて谷に流されている。土管には2種類あり、そのつなぎはコンクリートを用いているが、戦時下とあって砂を多くし、セメントの量を節約している。

今後、こうした資料をもとにして戦時中の実態を明らかにしていく必要がある。

### 引用・参考文献

- 阿部芳郎 2003 「南九州における縄文早期筒形土器の技術 いわゆる円筒形・角筒形土器の製作技術と機能」『利根川』24・25号 利根川同人
- 前迫亮一 2003 「石坂式土器再考」『縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター
- 前迫亮一 2003 「発掘された鹿児島の戦争関連資料について 幕末からアジア太平洋戦争終結頃まで」『鹿児島考古』第37号 鹿児島県考古学会